

# 日本人とディベート 国際交渉・国際会議の経験から

東京 山口 光 恒



赤坂御苑での園遊会にて 山口さんご夫妻 2017

筆者はこれまでに数多くの国際会議や交渉に出席してきた。例えば経済協力開発機構OECD貿易と環境部会（日本政府代表）、国際規格ISO14010環境小委員会（日本代表）、他に個人として参加したものに気候変動に関する専門家会議（IPCC）等がある。ここではOECD会議を中心に述べる。議題は例えば自由貿易の拡大と環境保護の両立、多国間貿易協定への環境条項挿入の効果等多彩な内容である。事前に各国に素案が配布され、加盟国は自国の対処方針を決めた上で出席し採否を決める。本会議で重要なのは各国の主張を良く聞きながら自国の主張も折り込み、外部の批判にも耐えられる内容に仕上げていくことである。

日本の場合議題ごとに各省庁の意見を聞いた上で政府としての対処方針が決定され、政府代表はこれを以て会議に臨む。ここで重要

なことは成果物の質と共に日本の存在感を高めることである。

筆者は日本代表として議題ごとに発言する立場だが、議論が紛糾した場合には対処方針とは離れてとりまとめに動くこともある。幸い政府の支持も受け、会議では比較的自由に発言が出来、また最後の10年間ほどは当会議で古株となり、副議長にも就任して議題の選定に関わるようになった。筆者は対処方針を読み上げること是一切せずそれを念頭に会議中の各国の発言を引用し、相手の目を見つめながら日本の主張を行った。国際会議で最も避けるべきは、当該議題についての議論が一段落した段階で議論の流れとは無関係に自国の対処方針を読み上げることである。そもそもタイミングがずれているので他国からは単に自国の主張を行ったとのエビデンス作りと見なされるのがオチである。

以上の経験から筆者が得た教訓は、日本人にはディベートの訓練が欠如しているということである。ディベートとは単に相手の言うことを理解するだけでなく、最終的に相手を説得する技術である。人生の後半で大学教授の職を得たのを幸い、慶応時代には毎年学部ゼミナール生16名を連れて北京の清華大学に赴き同大学の大学院生と地球環境問題について2日間英語での討論を行った。学生には外国でしかも英語で自分たちの主張を披露し、相手からの質問に答え、更に相手の発表に突っ込みを入れるという経験を強いたわけで、多くの学生からこれほど勉強したことはないとの感想が寄せられた。また東大では大学院と教養学部生が相手だったので、特に1

～2年生対象の授業で暫く授業をしたあと学生の半分を例えば太陽光推進派、残りの半分を原発推進派に分けてディベートをさせてみた。驚いたことにははじめは全く意見が出ない。これまでは専ら先生の言うことを理解することに重点が置かれ、自分で物事を考える訓練が欠けている。正解のない世界を初めて体験したと言うことだ。こうしたディベートを少し行ったあと今度は太陽光派と原発派の学生を入れ替えて議論をさせる。こうすることで徐々に議論が深みを増し、自分が何が分からなかったのが明確になる。日本の大学でこうした訓練を大いにやるべきと感じた次第だ。

筆者は政府の審議会委員も数多く務めた。多くの答申で当該問題の解決に向かって日本が世界をリードするとの表現が織り込まれている。これほどむなしい表現はない。少なくとも筆者の専門とする地球温暖化で日本が世界をリードしたことはない。しかしよく考えてみるとそもそも日本人の考え方の中で世界をどうすべきかとの発想が極めて薄い。日本には江戸時代までは中国、その後英独、第2次大戦後はアメリカという先生がいて、日本はその基準に如何に合わせるかに腐心してきたように見える。1980年代に先生を追い越したとたんに目標を見失い、停滞の谷間に沈んだ。これからの世界はどうあるべきかを問い、それに向けて全力で疾走する若者の出現に期待すること大である。そのため教育でのディベートの訓練は必須である。